

金子兜太 ある庶民考



合同出版

ある庶民考



合同出版

金子兜太（かねこ・とうた）

1919年 埼玉県秩父市生まれ。

1943年 東京大学卒。現在、俳人。

主著書 「少年」「蛭蛇」「暗緑地誌」「早春展墓」「金子兜太全句集」「旅次抄録」など。

文章集 「今日の俳句」「俳句」「定住漂泊」「詩形一本」「種田山頭火」「俳童愚話」など。

ある庶民考

一九七七年八月三〇日 第一刷

著 者 金子兜太

発行者 宮原敏夫

発行所 合同出版

〒101 東京都千代田区神田神保町一ノ五二
電話・東京〇三（二九四）三五〇六
振替・東京八一六五四二二

印刷 ミツワ印刷（株）
製本 東京美術紙工

・ご請求あり次第総目録送呈いたします
・落丁乱丁のさいはお取扱いたします

ある庶民考

ある庶民考

——茶覚え

.....5

私のなかの秩父事件

.....59

農民俳句小史

——農民のなかの俳句・俳句のなかの農民

.....87

ある庶民考——一茶覚え

なぜ、自分がとくに一茶に関心をもち、今までの一茶論などで、あまり問題にもされなかった作品に、とくに拘泥したりするのか、よく考えてみると、その理由にぼけたところが多い。わかったとおもっていることがわかっていないのである。もっとも、すっかりわかってしまったら、こんなものを書く必要はないのだろうが――。

それにしても、人の人に対する（人の作品に対するといっても、さほどのズレはあるまい）愛好とか嫌悪とかいったものは、ずいぶん好い加減なものだとおもう。したがって、その作品についてのさまざまなあげつらいというものも、相当に主観的で、客観性などというものは、言うべくして行ないえないことなのではないか、とおもう。客観的に言っている、と豪語している人の眼のまわりが、すでに赤く、独善の色を帯びているのを見かけるのも、再々ではない。

ところが私は、一茶の句や文を読むときに、その客観性ということに、人一倍気を使っているのである。なにかしら、一茶の作物こそ、絶対に主観的に読むではいけない、とおもひ定めてきた。そのままに読み、そのままに受けよ、と。

だから、たとえば正岡子規が、「一茶の特色は主として滑稽・諷刺・慈愛の三点にあり」と書きあげているのにぶつかり、また子規の分類癖がでてきたなど、敬遠してしまうことになる。こういう、評語の早手回しの当てはめくらしい、一茶にとって不適当なものはないとおもうし、この当てはめが、一茶をさまざまに誤解させてもきたとおもう。誤解でもかまわないではないか、美しい誤解というものもある、とある逆説家はいいが、いささかでも、まともに一茶を享受しようとするもの

には、それが目障りであることにまちがいはない。やはり、誤解を冷やし流し去るためにも、評語の性急な当てはめは避けたほうがよい、と思う。

（詩人、作家で、評語がじつにズバズバと当てはまって、そのことによって、さらに光彩を加える人がいるものだが、一茶は、そういうタイプの俳諧師ではなかった、ということである。そんなにへご立派な詩人ではなかった、といういいかたでもよいが、これもまた、一つの、急いだ規定付けになつてしまつて、危ないのかもしれない。）

私が、一茶にたいして、興味をこえて関心を深めるにいたつた事情のなかに、先輩・久保田月鈴子の「兜太は一茶だ」といった感觸の発言がある。たしか、戦後間もなくの『寒雷』誌（加藤楸邨主宰）の座談会だったと記憶するが、これは妙に、私に懐しいものを感じさせて、それこそ、忘れかけていた一茶を、私のなかに呼び戻してくれる効果があつたのである。

どうも、この月鈴子説に刺戟されたわけでもないだろうが、楸邨師をはじめ、師の周辺の人たちには、私と一茶を結びつける発想がずいぶんあつたし、いまでもあるようにおもえる。もう、これもずっとまえになるが、楸邨師に、一茶について書いてみたいのですが、と話しかけたことがあつた。すると、師は相好をくずして、君なら一茶ですよ、やりなさい、とひどく積極的に奨めて下さつたものだ。それが私を一茶にさらに近づけることになつたのである。

その後しばらくして、楸邨著『一茶秀句』（春秋社刊、一九六四年）が上梓されたが、私の見るかぎり

では、一茶句評釈中、もっとも情熱的なもので、その意味で白眉である。私が話しかけたころ、この著述の準備をしていたわけだから、私を一茶に結びつける師の眼には、単に感覚的とはいきれないものがあつたにちがいない、とそのときおもつた。

ただ、そういう判断も、多分に、その場かぎりの我田引水の面があつて、いつまでも恥かしいのである。そのあと、楸邨居を訪ねたとき、書架にあつた、伊藤正雄著『小林一茶』（三省堂刊、一九四二年）をお借りしてきた。米機の東京空襲で丸焼けになつたあとだから、師の書架はあらかた新刊書だつたが、そのなかで、戦争中に出たこの本は比較的古ぼけてみえた。私の眼についたのも、そのためだつたらう。

そして、そのときは、今にも一茶論をやる気概だつたことに間違ひはなかつた。しかし、家に持ち帰ると、そのまま一茶関係の本の上に積み加え、やがて億劫になつてしまった。ずっとあと、手にしたときも、通読に終わっただけで、お返しもせず、一茶論も一行も進行せず、いまに到っているのである。

私には、鵬とやどかりに似た習性があつて、書店で眼についた一茶関係の本は、なんでも買ってきて、あちこちに積んでおくが、系統的に集める努力は、あまりやらない。古本屋を探して歩くことなど、年に一回か二回やれば、いいほうである。だから、本たちは、鵬の贅のように散漫で、あちこちでひからびている。

そのくせ、私自身はキョロキョロと触角を動かして、外界を窺っているのである。一茶関係の論説

には、なかなか神経を使っているわけで、ことに自分に関連づけたものでもあろうものなら、すぐとびつく。

安東次男著『鑑賞歳時記』（角川書店刊、一九六四年）に、こんな文章があった。

「気質的に一茶と通う田舎者の性根を現代に求めるとすれば、さしずめ金子兜太あたりであろうか。『蚊帳の色山よりも濃く眺けている』、『蛾のまなこ赤光なれば海を恋う』、『土間口に夕枯野見ゆ桃色に』、いずれも金子の初期の句であるが、この第三句目など、一茶の『戸口から青みな月の月夜哉』と酷似した状況での発見である。こういう句を見ていると私には、現代にまで及んでいる日本の底辺を形づくる感性の掬がりというものを、改めて知らされる思いがある。感心するわけではない。自分自身の郷愁とやりきれなさとをも含めて、まったくため息が出る思いがするのである。」

これは、一茶の、

蟬　なく　や　つく　く　赤　い　風　車

を鑑賞したあとに、付記的に書きつけられたものだが、悪い気はしなかった。「田舎者の性根」も適評と受けとって、内心にこやかだったから、いちばんおしまいの詠歎も、それなりに受けとめておいた。

しかし、いささか氣にいらなところもあった。安東は、この本のなかで、一茶の作品を三句鑑賞

しているが、そのうちの一つ、

人間ば露と答へよ合点か

の末尾で、「露」に関連させて、川端茅舎を挙げていたのである。こう書いていた。

「この句のみならず、一茶が詠んだ露の句の多くは、追いつめられせっぱしまった人間が身につけた巧まざる人生知とユーモアに溢れている。『露はらり／＼大事のうき世哉』、『しら露に浄土参りのけいこ哉』、『露ちるや地獄の種をけふも蒔く』、『火ともして生おもしろや草の露』、『露の世は露の世ながら去ながら』。露を詠んでこういう句をなし得た俳人は、ほかには晩年の川端茅舎ぐらいのものであらう。『白露や屑買はんとて礼を作し』、『これやこの露の身の屑売り申す』（茅舎）。これらの句のみならず、正統的な一茶の世界が現代に受け継がれているとすれば、まず茅舎に指を折らねばなるまい。」

この最終の論定は、はなはだ問題を含むところであって、ここでは挙げていないが、私の好きな茅舎の露の句「金剛の露ひとつぶや石の上」をどう評価するかということにもかかってくる。「正統的な一茶の世界」ということばも曖昧である。しかし、これが明確にされないかぎり、茅舎への連脈を語ることとはできないわけなのだ。

とにかく、一茶と茅舎を結ぶ表現系脈は、否定できないところだが、それを「正統的な一茶の世界が現代に受け継がれている」形姿として捉えることができるかどうか、私は問題を残したかったの

である。いまもなお、これは問題として、私のなかに燻っている。

そして、そういう拘泥の念のなかに、これは、ほとんどが情として、一茶と兜太を結ぶ表現系脈をいってもらいたかった、という、まことにたわいない——まあ幼児の独占欲のようなものが潜んでいたことも事実である。そのくせ、もしそういわれたとしたら、いや、おれは一茶とは、相当のところ違う、と開きなおっていたにちがいないのだが——。

ところで、私が一茶に関心以前ともいうべき興味をもったのは、戦後ではない。

たしか、中学(旧制)の終わりごろだったとおもう。受験勉強の合い間に読んだ、相馬御風の『一茶と良寛と芭蕉』がそれで、この大正期の終わりに書かれた本が、私の一茶への興味をかきたてたのである。そのとき、良寛よりも芭蕉よりも、一茶への興味をかきたてられたということのなかに、すでに、私と一茶との近さが看取されていたのかもしれない。

近い、といえば、私の育った秩父盆地(埼玉県)と、一茶が生まれ、十四歳までそこに居、五十歳で江戸から引きあげてきて定住した、北信濃の柏原は、いわば山つづきである。秩父は、奥多摩、山梨(甲州)、群馬(上州)、長野(信州)と山を接していて、信州佐久地方との峠越えの交通は、往時なかなか盛んであった。甲州また然り。秩父盆地のなかでも奥秩父は、むしろ武田領といったほうがよいくらいであって、いまでも、甲州の感が強い。上州に入ると、すぐ碓氷峠で、信越本線は長野を通り、黒姫駅を通る。信濃町柏原はそこにある。

要するに、上武甲信の山塊は同郷、といった感じがふかいのである。山国のものたちは、平野の住民に対してよりも、山つづきの住民に親しみをおぼえるものだ。御風の著書を読んだあと、一茶をひどく身近の人のように感じたことにもそれがあるのかもしれない。

そして、さらにその向こうの山並みの遙か末に、良寛のいた国上が感知できて――。

なぜ、それにしても、相馬御風のこの本を読んだのだろう。その動機は不明だが、すくなくも、御風の文章がもっている〈甘味のある心的叙述〉に、しだいに、なんとなく引きつけられていて、全部を読んでしまったことは事実だった。一九三〇年代の当時、宗教者や、山頭火、放哉のような放浪者とともに、そのいずれにも属さない、いわば定住の求道者（私はこういうタイプの人を〈定住漂泊〉者と見ているわけだが）の文章が、青年期に頭を突っこみはじめた若者たちに、あながい親しまれていたことも、これまた事実だった。

かれらの文章は、宗教者ほど教説的でもなく、放浪者よりは抑制的であった。厳肅なメンタリティ（心的活動）が、しばしば感傷と重なり、詠歎を生んで、むずかゆい甘味を感じさせもした。そして、田舎青年にとっては、その甘味は、決して不愉快なものではなかったのである。それを読むことによって、自分の感傷を恥じらう必要はなくなり、ひそかに心奥に蜜を貯えることができたのだった。

そのせいか、御風が引用する島崎藤村の「あの芭蕉に見るやうな純粹な心は、あるひは一茶に見出されないかも知れない。けれども、私達の煩惱を代表してゐるやうな一茶の強い執着は、自己の欲するところを芸術にも実現せずには措かなかつた。その心は晩年に到るまでもすこしも衰へなかつた。

芭蕉や蕪村に比べたら、一茶はずっと私達の時代に近い人だ」という見方も、いま見ればあまり新味はないのだが、当時はまことに新鮮な印象だった。求道者が「一茶の強い執着」を認め、その身近さを肯定するところが、「一茶の芸術的表現が、自由であり、無造作でありながら、浮薄の気のないのには、彼の天真——野人そのままの彼の天真が与つて力あつた」といった甘い書きかたと重なって、妙に浸透力をもっていたのである。「強い執着」と「野人そのままの天真」との短絡に気づくほど、当時の私は世慣れてはいなかった。

おもしろいことに、この御風流の文章と、一茶そのものへの興味が融け合ってしまったて、戦後、それも一九六〇年代になるころまでの私の一茶像には、御風流のにおいが付きまとい離れなかったようにおもう。

私は生来の物ぐさ者のせいか、一人の詩人を理解するのに、まず、解説書から入る癖がある。いや、一人の詩人、芸術家に関心をむける動機が、その人の作品ではなくて、その人についての解説であることが大方である。そして、途中から、直接に作品にむかうわけだが、そのときになって、あんが詰まらないとか、発見したとか、ということが発生するのである。だから、本当に、その人に密着するまでには時間がかかり、ジグザグする。途中で飽きてしまうことも多い。

ただ、ときに、まったく偶然というほうがいいのかもされないが、評論や解説のニューアンスとその人の作品の融合が、作品の内容以上の享受を可能にすることがある。それは間もなくわかって、その人への幻滅ともなるのだが、一茶の場合の初発の関心（関心以前の興味）には、それがあつた。つま